

神塚淑子著 『道教思想10講』

道教の入門書といえ、すでにいくつか有名なものがあるが、それぞれの目次を見ると、その構成に大きな違いがあつて、たいへん興味深く感じられる。なぜなら、そこに各著者の研究歴や道教観がにじみ出ているように思われるからである。よく言われるように、道教に關しては、いまだ定型的な語り口がなく、「道教とは何か」という問題にいたっては、永遠の謎かけのようになつてしまった感もある。それでも、入門書を世に問うからには、それぞれに「これが道教だ」というものを描いてみせざるをえない。とすれば、本書もまた入門書で

廣瀬直記

あると同時に、著者である神塚氏のオリジナリティーに満ちた作品といえるのではなからうか。

氏はこれまでに『六朝道教思想の研究』（創文社、一九九九年）、『道教經典の形成と佛教』（名古屋大學出版會、二〇一七年）などの研究書を上梓し、唐末以前の道教研究の大家として國內外に知られている。本書は岩波新書10講シリーズの一つとして二〇二〇年に書き下ろされたものだが、「道教思想」というメインテーマは『六朝道教思想の研究』以来、氏の研究の中心にあつたものではなからうか。その目次を見ると、生命觀や宇宙論、

救済思想などの言葉が竝んでおり、あまり目立った特徴のない構成に映るかもしれない。しかし、扱いの難しい道教文献をうまく處理しながらその思想を汲み取り、かつそれを普遍的な枠組みのなかに落とし込んでゆくことができるのは、氏の學識の深さによるところであり、むしろ本書の獨自性が強く現われている點といえるだろう。以下、各講の紹介をこころみたいと思う。

第1講「道教の始まりと展開」では、道教の歴史が概観される。後漢末の太平道と五斗米道から説き起こされるが、「道教の始まりについて述べることは、實は難しい問題である」(六頁)として慎重に諸説が併記される。また、宋初以降の記述はあつさりしているが、それは神塚氏の専門がそうであるように、本書の内容が主に唐末以前の道教に焦點を當てていることと關連していると思われる。

第2講「道」の思想——通奏低音としての『老子』では、『老子』の思想が道教思想の通奏低音となっていくことが述べられる。とりわけ、道教が「道」との合一

を究極の理想としており、その「道」が『老子』のいう「道」と同じものだという指摘や、『老子』のいう根源への回歸が道教の修養論において重要な意味をもつという示唆は、道家思想と道教との關係を考えるうえで見落とせないだろう。

第3講「生命觀——氣、こころ、からだ」では、まず不死を理想とする道教の生命觀の根底にあるものとして、中國古代の氣の思想が取り上げられ、神あるいは精神が氣の精微なるものとして捉えられていたことが説明される。そして、最古の道教文献の一つである『太平經』などにおいても、そのような精微なる氣のコントロールが長生ひいては不死に至る方法の鍵になっていた、ということが述べられる。

第4講「宇宙論——目に見える世界を超えて」では、まず目に見えない世界に關心を寄せる點が、儒家と異なる道家の特色であることが説明され、その一例として『老子』における天地萬物の生成論が挙げられる。そして、その思想は道教にも受け継がれるのだが、道教の場

合はそこに神格が介在することが特徴的なだと指摘される。續いてまた、そのように生成された天地萬物が、道教のなかでどう秩序づけられているのが示される。

第5講「神格と救済思想——自己救済から他者救済へ」では、道教の救済思想には、大きく分けて神格が登場して人々を救済するタイプと、人が自力で理想の状態に到達して救済されるタイプがあるとされ、ここでは前者の系譜が後漢の『太平經』、『老子變化經』、五世紀はじめの『神呪經』、靈寶經を通してたどられる。そして、それらには終末的な大混亂を経て新たな天地のめぐりは始まり、その際に人々の救済が行なわれる、という共通のパターンがあり、それが道教の救済思想の大きな特徴だと述べられる。

第6講「修養論——内丹への道」では、救済思想の後者のタイプが道教の修養論として取り上げられ、「形（身體）神（精神）合一」というその理想の境地がいかなるものかが、三國魏の嵇康「養生論」、唐代の司馬承禎『坐忘論』を通して示される。續いて、「性（心性・精神）

命（生命・身體）雙修」という内丹修養の重要概念も、そのような理想を象徴するものだったと指摘される。また、宋代以降の内丹修養では、「形↓氣↓神↓虚」のように人體の生成過程を逆行することで成仙できるとされたが、そのような理論も吳筠「神仙可學論」をはじめとする唐代道教思想のなかに、すでに準備されていたことが述べられる。

第7講「倫理と社會思想——政治哲學としての道教」では、まず『太平經』や『抱朴子』では、行爲の善悪と壽命の長短が關係づけられており、何が善であり悪であるかは儒教倫理や傳統的な日常倫理にのっとっていること、および靈寶經の戒には以上の倫理に加えて佛教戒の影響が見られることが指摘される。そして、宋代以降にはそのような道教の傳統を汲む善書や功過格が広く流布したことが述べられる。また續いて、公平で偏りのない世の中を理想とする『太平經』の社會思想や、治身を治國の前提とする『老子』注の政治哲學などが取り上げられる。

第8講「道教と佛教——三教並存社會のなかで」では、佛教が道家思想や神仙思想を介して中國に受容される段階で老子化胡説が生まれたが、佛教が中國に根づきはじめると、それが三聖派遣説などとともに佛道論争のテーマになったことが述べられる。一方同時に、道教は漢譯佛典から多くのものを吸収して靈寶經を作り出し、その路線が隋唐以降の道教の主流になったと説明される。ただ、靈寶經のなかには佛教の影響を受けても搖るがない道教の「固い核」がいくつあったとされ、ここでは「孝」の思想と「自然」の概念が取り上げられる。續いて、一般民衆の間ではもともと佛教と道教の違いは重要でなかったこと、および宋代以降には道教や儒教の内部でも「三教歸一」の思潮が高まることが述べられる。個人的には、この第8講が『道教經典の形成と佛教』の大著をものされた神塚氏の力が最も發揮されている、本書の精華だと感じた。

第9講「道教と文學・藝術」では、まず上清派道教と六朝文學との関わりが、冥界に對する興味關心や、上清

經に見られる幻想的な詩文・文體などの點から説明される。續いて、上清派道教と接點のあった人々として、李白をはじめとする唐代の詩人・文人、王羲之、顔真卿などの書家を取り上げられる。そして最後に、道教と中國の書畫論が、存在の根源にある「道」への復歸を説く『老子』の思想を共通の基盤としていたことが指摘される。

第10講「道教と日本文化」では、道教は佛教のように組織だつて日本に傳來しなかつたが、道教關係の書物は日本に入ってきており、道教を構成する一つひとつの要素、たとえば神仙思想、呪術・方術、醫藥・養生思想などは古代から日本文化の一部となり、その展開に影響を與えたことが述べられる。また中世には、道教の構成要素は佛教、神道、陰陽道、修驗道、民間信仰と習合し埋没したが、江戸時代になると、道教の傳統を汲む善書の教えが一般の人々にも廣く浸透したり、さらに貝原益軒や三浦梅園、平田篤胤ら道教の思想や文獻と深い関わりをもつ學者・文人が登場したりする新展開があつたとさ

れる。

本書はその書名の通り、「道教思想」にフォーカスしている點に特色のある入門書だが、評者が通讀して新たに氣づいたのは、第2講のサブタイトルが「通奏低音としての『老子』」であることに象徴されるように、道教思想を根っこの部分から理解したいという態度が一貫して見られることである。たとえば、『老子』、『莊子』をはじめとする中國古代の思想、および『太平經』、『抱朴子』などの最古層の道教文献と、六朝時代の上清經、靈寶經、ひいては隋唐道教思想とのつながりが常に意識されており、全體として「宗教思想史」が描かれているともいえる。そして、それがこの新書に學術的な深みと厚みを與えているように思われる。また、もう一つ氣づいたのは、いたるところに「第○講で述べたように」というリンクがはりめぐらされており、本書が注意深く設計されていることである。それによって、ある講で取り上げられる思想の内容が、別の講のものとうどう關連しているのがよくわかった。

ということ、本書は道教に興味をもつ他分野の研究者、大学院生にぜひとも手に取ってもらいたい一冊である。ただ、一般の若い人たちにとっては、やや敷居の高ところがあるかもしれない。というのは、本書を讀み進めるには、原典資料の書き下し文を大量に讀まねばならないからである。神塚氏は名大中哲の講義をイメージしているのかもしれないが、平均的な大學生はこの書き下し文を讀んでもあまり意味がわからないのではなからうか。原典資料に關しては、氏が『六朝道教思想の研究』でそうしていたように、現代語譯で示したほうがよかったのではないかと思う。あえて書き下し文にしたのは、學術的配慮だったのかもしれないが、氏の現代語譯であれば、誰もが全幅の信頼を寄せていただろう。

また、はじめにも述べたように、入門書といえども著者それぞれのカラーが出るものであり、研究者の間で見解の分かれる部分がいくつかあるのはやむをえない。とりわけ、評者が引っかけたのは、「上清派道教」という言葉がキーワードのように繰り返し現われることであ

る。本書を讀みながら、上清派の道教があるからには、ほかにいろいろな派の道教があるのかと思つたが、本書では靈寶派という言葉が一度見えるだけだった(二三頁)。とすると、おおむね普通の道教があつて、そこから外れる上清派という特殊な一派があつたということなのだろうか。また、上清派の系譜のようなものも擧げられていたが、それは歴史的事實なのだろうか。かりにその一部がそうだったとして、なぜ彼らを上清派と呼ぶ必要があるのだろうか。たしかに上清經という經典群はあるが、なぜ經典群の分類と人々の分類が一對一の關係になるのだろうか。上清經の内容は、自然とその周圍に特殊な一派を形成させずにはおかぬほどのイデオロギーに満ちたものだったのだろうか。

以上、思いつくままに素朴な疑問を竝べたが、本書が優れた本格的入門書であることに疑いの餘地はなく、今後いくども重版されることが期待される。そこで、評者の氣づいたわずかばかりの誤字を指摘して締めくくりたい。「永和五年」↓「永和六年」(二五頁)、「太平天

國」↓「太平眞君」(一八頁)、「以外の以外の」↓「以外の」(七五頁)。

(新書判、二四二頁、二〇二〇年九月、岩波書店、九四六圓(税込))